

農業を中心としたカンボディアの 現状と将来

佐 藤 孝

(昭和32年1—5月, 兵庫農科大学カンボディア学術調査)
(昭和35年12月—37年9月, カンボディア農業センター)

I 緒 言

カンボディアについてはすでに新聞、雑誌その他で、幾度も報道され、耳新しいものがないかもしれないが、長年の間熱帯農業に異常な興味を持ち続けてきた一農学徒の筆者が、2回カンボディアを訪ねる機会を得、その間に見たり、聞いたり、感じたことをここに記してみるのも、何かの参考になるのではないかと思う。

数年前、元首シヤヌーク殿下のプライベートに関することを興味本位に書いた本が問題になり、日カ両国の友好に悪影響を与えた遺憾な事件があった。筆者はカンボディアのあの真に平和な国民性に非常な好意と魅力を持ち、シヤヌーク殿下の優れた政治力に敬意を払う者である。この拙文がカンボディアの人の目にとまることは恐らくないだろうし、またあっても問題にされるようなことはないと思うが、もし文中に少しでもカンボディア人の気にさわるような表現があったとしても、それはカンボディアの一層の発展を願うあまり、つい筆者のもらした不満の言葉で、決して他意のあるものでないことをお断りしておく。

ほとんど無警備に近いシヤヌーク殿下の国内巡視、国民がひざまずいて元首の体に触れて感激している光景を眼のあたり見て、今一国の元首が、このようなかっこうで、国の隅々まで廻れる国がどこにあるだろうか。元首は国外では独裁者ともいわれているようであるが、いわゆる独裁者というイメージからは程遠い感じがする。殿下の国際間に於ける声望も高まっている。バランスをうまくとって東西両陣営からの援助を受けているやり方を批判する向もあるようであるが、これは元首の外交的手腕が優れているからであり、政治的見通し、判断力が正しいからであり、根本的には印度支那半島が東西両陣営にとって極めて重大な意義を持つからであろう。国民の99%までは元首に忠誠を誓っているだろうが、僅かの反国家的分子は国内においても、また亡命先からも反シヤヌーク的な宣伝や行動をとっていることだろう。数年前に起った王宮内の爆弾事件も何かその辺のことを物語っているようであるが、それにもかかわらず元首の行動は自信に満ち満ちているようである。しかし反面、元首の偉大さにかくされてか、

片腕或いは後継者の人物が無いともいわれる。総べての国事は元首一人の胸の内に入り、繁雑な政務に元首は追われ、他から見れば非能率というそしりを免れない。この現象は国の全ての機関にもあらわれており、例えば筆者が2年間いた農業試験機関でも総べてのこと、どんなに細なことでも場長の目を通さなければ事が運ばない。出張で不在にでもなれば大変であった。

カンボディアの現状を日本の明治維新のそれと比肩する人もあるが、そうとは思われない。東西両陣営から莫大な経済援助を受けているが、国民特に為政者の心意気は当時の日本人のそれとは格段の差があるようだ。外国の経済援助もその目的に使われることなく相当量が政府高官等の私腹を肥すことに使われてしまう国が多いということである。カンボディアでは官吏の汚職は死罪に処せられるというが、未だ1人も処刑されたときかない。真実に汚職が皆無であれば幸である。

バランスをとってはいても、外国の援助に大きくいつまでも頼り、国の基礎である経済的な安定、発展がないと平均台の上のバランスの様なもので、何時左か右にぐらついて倒れないとも限らない。国家経済の安定、発展を計るには、我田引水かも知れないが、地下資源のないカンボディアとしてはどうしても広大な土地、豊富な熱、光、水と勤勉なカンボディア農民によって農業生産を高め、世界の市場に活躍するより他に途がないようである。しかし、農業問題をとりあげる前にカンボジアの現状、特に外国の援助、カンボディアの国民性等について述べてみたい。

II 外 国 援 助

軍事援助では時には泥沼に金や資材をつぎ込む様な結果になりかねないこともあるが、建設的なもの、生産的なもの、または文化的なものでも、後進国の援助は実に難しいものであることを痛感する。マーシャルプランが、すでに技術と能力の基盤をもつ西欧で成功した場合とちがって、後進国では援助を生かすだけの経験と知識、更には意慾とか、道徳心とか、愛国心とといったようなものが欠けている。単に工場や病院、試験場を作って贈与することは簡単だろう。しかし、それが外国の指導を受けずに自立して、その力を発揮し、その国に真にプラスするものになることは少い。カンボディアにおいても米国をはじめとする自由諸国も、中共、ソ連等の共産諸国もいろいろの援助、協力を行っている。日本の技術援助で出来たプノンペン水道拡張、今進行中のトンレ河の大橋等はプノンペンの人々の生活の向上に役立ち、便利になったことは確かであるが、ただそれだけのことである。この様な援助で感謝の気持ちが少しでも親日的な空気にプラスすればよいが、それを当然のことと期待するのは無理なことで、少しでもそのような気配を感じとられたらマイナスである。いくら援助してもきらわれる米国の援助方法は充分検討されなければならないし、共産国の反米宣伝の好材料を提供するだけでは、米国内でも問題にされるのは当然で、こういった米国内の批判は「最近の米対外援助実情調査団ク

レー委員会のきびしい援助削減の勧告が公表されるに及んで本格的な政治的圧力となってきた」(朝日新聞)。

共産国の宣伝といえば、華僑の多い東南アジア諸国ではどうしても自由諸国は押され気味になるようだ。カンボディアは、華僑が最も自由に活動出来る国であろう。もち論カンボディア国籍が多いが、中国人の大部分、特に若い世代は祖国を中華人民共和国と誇っている。ここにも中共の宣伝、啓蒙の滲透効果は大きい。数少い国府支持者ないし中立的な華僑は声をひそめている。この様な人には勿論財界の大物がいるようであるが。しかし、米国自身の反省も必要だろう。例えば、カンボディア人のどうにもならないウイークポイントとも言うべき——彼等自身がそう思っているようだが——はだの色の黒いということ(もち論その黒さは大したことはないが)に関して米国内の黒人差別は共産国特に中共系の華字新聞の好反米トピックスとして、事件のある毎に大きくとり上げられている。九じんの功を一きに欠くの感がある。事実カンボディア人のインテリの中にはこの問題を大きくみている者が多い。

各国の援助の様子を見ていると、少くとも或る程度の愛情をもって援助しているのは、フランス一国だけのような気がする。長くフランスの植民地であったにもかかわらずカンボディア人のフランス人に対する態度は旧友の感があり、インドネシアとオランダのような感情は両国の間には無さそうだ。元首の親仏的な言動の影響の大きいことは言うまでもないが、フランスの国民性によることも大であり、またフランス語がカンボディア人の少しでも教育のある者の間では、ほとんど日常語のようにになっている点で心のそ通が充分あるという点も見逃せない。また、フランスの援助が真にカンボディアの欲しているものによくマッチし、政治的にも経済的にもあくどさが無いように感じられた。

援助から生まれる実質的な効果という点では、フランスを除けば、米国もソ連、中共もあまり差が無いのではないだろうか。最初はカンボディア人にアピールしても、間もなく種々の欠陥があらわれてきている。例えば、中共の綿織物工場、製紙工場、合板工場、ソ連の病院等カンボディアにおいては異彩を放つ建物もその生産、活動の内容は貧弱なようだ。これはカンボディア人自身の能力のしからしめるところであるが、援助国の責任でもある。カンボディアのような後進国の産業(もち論農業を含めて)や文化を築く段階は step by step でなければならない。また、政治的な目的の援助ならカンボディア人の一時的な喝采を博するものを次々と行ってゆけばよいだろうが、日本のようにむしろ経済的な目的の色が濃い援助、協力では、効果について充分考慮しておかないと、やりがいの無いものになってしまう。

以前から筆者の持論であるが、カンボディアのような農業国は工業化に着手する場合には先づ農産物に基礎をおいた工業から始めるべきで、その際にも農業生産の技術的、経済的基礎を確立してからでなければならない。表現が不完全であるので例を上げて補足するならば、綿織物工場を作るためにワタを栽培するのではなく、ワタを作り、原綿として世界市場で競争出来

るようになって初めて、綿織物工場を建てるといった方が順序としては妥当で確実性があるが、実際は中共援助の綿織物工場が贈与されることになって大々的に棉作を奨励し、一応目標は達成、更に大增産への態勢にあるが、この綿織物工場で生産される種類の綿布は早くも生産過剰になっており、増産された原綿は収穫法や格付の拙劣さから（実際は格付もされていない）、国際市場には出せないしろ物だといわれている。更に、筆者はカンボディアの棉作の栽培面においても棉作の歴史と2年間の実験を根拠として非常な不安をもっている。その他、いまカンボディア政府で着目されている製麻工場の設立であるが、その前にジュートやケナフの適地の選択、栽培法、生産量の見通し等が先行しなければならない。搾油工場、澱粉工場、もっと大きな規模では製糖工場にはそれぞれ原料の問題が先行しなければならないことは当然である。こういった点でカンボディアの農業専門家の言動には何か解せないものを感じた。

経済援助をもっと生産的な方面に使わなければならないということはカンボディアでも反省され、新経済5ヶ年計画（1959年12月の閣議で承認）にはこの方針がたてられ、生産増強、貿易拡大に重点が置かれている（カンボディア王国便覧）。

Ⅲ カンボディア国民

カンボディアに永く滞在すればする程、カンボディア人に接すれば接する程、クマイ（カンボディア原住民）の好人物に感心する。この性質は仏教の賜とか、豊かな天産と穏やかな自然のしからしめるものなどいろいろ言えるだろうが、やはりこれはクマイの天性であろう。カンボディアの農民は主としてこの人の好いクマイからなっている。よく南方の人間は怠惰とか、楽天的で働かない等言われているが、これに対して筆者は異論をとえたい。かつて3年間暮したモルッカ群島の島民もそうであったが、カンボディアの農民もその労働力の大きいのには驚いている。彼等と共に農作業をしてみればはじめて解ることだが、体力もあり頭もよい。恐らく東南アジアの農民は皆この様であろう。ただもし彼等が労働意慾を失っているとすれば、その責任の大半は永い植民地時代の搾取や独立後の為政者の無策に帰されるだろう。筆者は彼らの労働力を高く評価したい。農民にはこの他、ラオス人、タイ人と少数の中国人、ベトナム人もいる。カンボディアの官吏で最も真剣にその職責を果している人の第1位に小学校の先生をあげたい。初等教育機関は数も増し建物もよくなってきたが、内容の充実はこれら先生方に負うところが多いだろう。カンボディア人で一番ファイトがあり、人目につき易いのはバスの運転手、車掌そして荷役人として乗りこんでいる青年達である。鉄道の機関手、メコンやその支流を上下する汽船の操だ手や機関手、それに理髪屋、こういう職業のカンボディア人は実によく働く。生存競争のはげしい日本の同じ職種の人に比べても決して劣らない。それどころかバスの乗務員の勤務時間は日本のそれよりはるかに長い。軍隊や警察の構成もクマイである。精かん顔立ちにもかかわらず軍人や警官から受ける印象は素朴くで気持がよい。辺境地の警官の

親切さなどはカンボディアの最もいい印象として永く忘れられないだろう。高級官吏や政治家には純粹のクマイもいるが、枢要な地位を占める者になる程ベトナム、中国、インド等の混血した者が多くなるようである。それにしてもこれらの諸民族が融和して平和に暮していることは日本人としても大いに見習わなければならない。ベトコンとかパテトラオとか又は盜賊が多く外国人の安心して歩けない国に囲まれたここカンボディアだけは別天地のようである。しかし国民の貧富の差は大きい。よくカンボディア人の貧富の程度を平均して如何、と問われるが、ちょっと答に困る。何故なら、この様な両極端の数字の上の平均値を求めても、その様な階級は実在しない。この様な現象はいろいろの面にもみられる。

カンボディアの技術者、特に農業技術者について述べよう。農業技術者には *ingénieur*, *contrôleur*, *agent* の3階級がある。これは学歴によって厳然と決められており、下から上の階級へ登用試験によって昇進する途はあるようだが、実際は無いのも同然であった。従って、上の者は生涯その身分が保証されることにより、下の者は昇進の途をあきらめさせられることにより、共に活動意慾をそがれているように思われる。極端なことを言えば、学歴のみが生涯の身分や地位を決定ずけてしまうので研究や活動、昇進の意慾を失ってしまう、とあっては教育は反ってマイナスの効果をもたらすことになる。試験機関での技術者の働きぶりをここに書くことは差しひかえる。ただこの様な状況のもとでも例外はある。バツタンバンの *agent* Uoe Chhuong 氏を紹介しておく。氏の活動ぶりは感嘆のほかない。一人でもこの様な技術者がカンボディアにいるという事実によって筆者は将来のカンボディア農業の発展に望みをかけることが出来る。

研究や調査の計画は農林省の極く少数の担当者で立案され、実際の試験や調査は試験場で行われ、結果としてあらわれた数値だけが再び農林省に送られ、ここで試験等の実施に直接関与しなかった計画者の手でまとめられる。この辺にもカンボディア農業発展を阻害するものがあるように感じられる。試験は途中の経過が全く観察されない。最終の収量の数値だけが報告されるので、たまたま試験途中で一処理が虫害、鳥害、ねずみ、時には牛の食害を受けても気付かれずそのまま報告されるだろう。このことは、処理の判断を誤るおそれがあり、また農業のより発展への思考をストップしてしまう。病虫害調査をしていた農業センターの日本人担当官の結論では、水稻作で施肥の効果は分けつ増加に顕著にあらわれてくるが、施肥区の虫害は甚大で、結局施肥の効果があらわれてこなくなる。薬剤散布等虫害の防除手段を構ずれば、という次の段階への思考、手段の途が、経過をぬきにした収量調査だけでは断ちきれてしまう。今後の農事試験には近代統計学をとり入れて行わなければならないというカンボディアの農業専門家の意見はもっともなことであるが、それ以前の問題が沢山ある。また日本の農業研究機関を見学した専門家はカンボディアでもアイソトープを使った育種を始めなければならないという意見を述べていたが、これも同様それ以前の仕事が山積みしているようである。

カンボディアの技術者はカンボディア農業についてのどんな質問にも即座に答える。しかしその答が正しいものであるかどうかはこちらで判断しなければならない。モルッカ群島の郡長、村長や農民についても同じような経験があるが、これを彼等のうそつきと決めてしまうことは出来ない。知らないということを非礼と心得ているようで、むしろ好意に感謝しなければならない。これも植民地時代の卑屈さと強制の名残りと言えればそれまでだが、こういった事はこれらの地方の調査の際、心得ておかないととんでもない見当違いの結論を出すことになる。

これに似たことが統計でもみられる。よく後進国のいろいろの分析をする際、信用するに足る統計のないことが指摘されている。信用するに足る統計を作り出せる国はも早や後進国の範ちゅうに入らないかもわからないが、イブ・アンリーはその著書“仏印の農業経済”において統計作成の困難さと、その信用程度について述べているが、これは今も変りがない。実際統計が作成されるところをみて驚いた。時には単に創作であることもありうる。地方のこういった報告が中央に集り、さらにディスカスして発表される数字であるからその積りで見なければならぬ。気象観測のデータのような単純なものでも、観測されている現場を見れば同じようなことが言えるだろう。要するに調査されたり観測された数字のもつ意味の重大さを認識して正確な統計資料の得られることが国の将来の発展に寄与するものであり、現在の国威を宣揚せんがために数字に誇大さを取り入れるような考がもしあるとすれば、それは決して好ましいものでないことを強調したい。

カンボディアの或る有力な人が次のように言っていた。「日本へ留学した者が一番よい。日本で身につけてきた学問なり技術はカンボディアで直ちに役立つ。米国に行った者は、向うのスケールが大きすぎてカンボディアでは直ちに適用できない。フランスに行った者はフランス語がたん能になり、帰ってからは、も早や技術者として立ってくれなくなる」。多分にお世辞が含まれているとは思いますが、我々としても想像出来ないことはない。実際日本に留学し、長年滞在して基礎から勉強した者は、数はすくないがよく活躍しているようであった。短期間日本の各地を見学して帰る場合は日本に好感をいだくようになる者は多いが、その成果については筆者は疑問をもっている。

IV 農 業

1 農業技術援助・協力： 現在農業関係で外国の援助の行われているのは、フランスの棉作、ゴム、コーヒ、米国の種畜場、日本の農畜センター（未発足）であろう。中共は種畜場を贈与しているが技術者を派遣していない。米国の種畜場は、政府が将来開発を計画している西南部のへき地に設けられ、ジャングルとマラリヤとたたかいながら、米国人はパイオニア精神を発揮して仕事をしている。ここを訪ねた日本人はそのファイトのおう盛さに感服したという。その他米国は研究費や肥料を供与して各地に水稻の試験を行っている。栽培に当たっている

のは試験場のカンボディア人の職員で、前に述べたように収量のデータだけを中央に送り、USEF の技術者とカンボディアの技術者とが協力してまとめ、結論を出しているようであった。収穫後の水田の土壌調査に来た USEF の技術者は無肥料区に風化した牛ふんの山のあるのを見て、ため息をついていた。フランスは計画省関係で棉作に関する技術協力をしている。カンボディアで最も肥沃な赤土地帯や黒色棉作土壌地帯に設けられた棉作試験場のワタの出来ばえは素晴らしい。カンボディア政府が指定した日本の援助で出来る農業センター予定地は、穀倉といわれるバタンバン州のへき地で、土壌はやせており、平たん地で今のところ水のコントロールが全く出来ないところにあり、雨期の水稻以外はほとんど何も出来ないような条件の悪いところである。畜産センター予定地はコンボンチャム州にあり、ほぼ国の中央に位しているが、予定地は雨期に浸水する部分が多く、土壌は近くの赤土とは比べものにならない程やせている。このようにフランスは必ず肥沃地を選んでいいるから、みたくにはフランス人の技術が優秀であるかのようにカンボディアの農業専門家や政府要人の目には映るようだ。不良環境下における日本の技術がたとえ科学的に立派に説明できるとしてもカンボディア人にはそれを正しく判断することは出来ないだろう。カンボディア将来の発展のためのパイオニア的役割を果そうとする米国や、自然環境で初めから不利な立場にある日本と、フランスのやり方を比べてみるとカンボディア人にアピールするのはやはりフランスであろう。実際現在の農業センターでは労多くして効少しの感がする。

米の不足している国に稲作の技術指導をすることはそれ自体意味があるが、カンボディアのように米の輸出国へ、しかもその輸出の伸びが期待に反した場合、稲作指導をして増産したものを日本が買入れなければならないとなると問題である。もし買入れなければ反って反感をかうという結果になりかねない。しかしまた、技術援助したからといって、効果が直ぐあらわれてくる程、普及組織や農民の頭が進んだ国でもないから、日本の得意とする稲作を通じて農業技術をカンボディアの技術者に伝えればそれでよいとの見方も成り立つ。しかし米の不足するマライへの稲作指導でも、米の輸出国のタイから苦情が出るということである。第6回 FAO のアジア極東地域会議に出席した農林省山下参事官の報告はこの点で興味がある。氏は「この会議で、この地域の各国の農業計画をハーモナイズするという動きがみられたが、このことは極めて望ましいが実行するとなると非常な困難が伴うので、一朝一夕には実現できない」(熱帯農業 6巻3号) と述べている。いろいろの点で異質の東南アジアの諸国がこういう面で協調しあう可能性は全く考えられないが、日本とその援助、または協力国の2国間だけにでも或る程度の経済的な結びつきをもち、それにマッチした技術援助をする方向をとりたいものである。ただこの場合、植民地支配的等の悪宣伝をされることを予期して警戒しておかなければならない。しかし、経済を抜きにした援助、農薬や肥料の売込みを考えない協力(表現が悪いが)も必要と思われる。兵庫農大の岩田教授を中心とするタイの天敵の調査は学術的価値も高いが広い意

味での技術協力であり、地味ではあるが永い目でみれば非常な効果が期待出来る仕事として今後も続行されなければならないことだろう。また農業生産を高めることのみにあせり、おろそかにされているように見受けられる点、例えば肥沃度の維持増進、緑肥や輪作等に関する指導も熱帯の後進国には大いに必要と思われる。

2 農業に関係ある気候、地勢： 略する。

3 農業の現状： カンボディアの農業はこの気候、地勢のところに発達したものである。そして、日本のように気候や地勢が悪い条件の場合は、これを人力や機械力で克服してゆくということではなく、全てこれに順応して行われる。気候、特に雨の季節的配分や量は年により、地域によって相当異なることがあるので豊凶の差も甚しいし、乾雨期がきびしいことと、地勢が平坦であることは、乾期における灌漑用水の溜池を作ることが困難であり、雨期における排水が困難である。このことは農業上大きな障害となり、平地は雨期における水田としてしか役立たない。雨期にも浸水しないところは東部及び西部にあるが、肥沃な赤土地帯はゴム園に供され、残されているところは疎林が多く、土壤の肥沃度が劣り、僅かに小面積の水田が散在する程度である。

このようにカンボディアの農業は自然の制約を強く受けているが、反面原住民農業は何千年もの間その風土に適した農法を行い、これに適した作物の種類や品種もあるわけである。例えば、浮イネはカンボディアの自然において芽生えた最も適したイネといえるだろう。バタンバン州で行われる水稻直播栽培法をみてもなかなか科学的である。また水田の耕起は全て畜力で行われている。カンボディアの稲作の状況を見て、収量を今の2倍にも3倍或いはそれ以上にも高めることは難しいことではないという日本の技術者は多い。それ程カンボディアの稲作は日本人の目には遅れたものに映る。品種、施肥、正条植、病虫害雑草防除、灌排水施設等を考えればもち論そのことは可能であろうが、同時に、或いはその前に現在のカンボディアの農業（稲作）に含まれている優れたものを見つけ出し、これを伸すことも大切であろう。

4 各種農作物栽培の現状： 略する。

5 栽培面よりみたカンボディア農業の将来の型： ゴム、コーヒ等のプランテーション作物を除き、原住民農業の根本的な技術の改善ないしは高度の技術を発展させるためには水をコントロールする土木工事が先行しなければならないだろう。

今、土木工事が行われたとして現在の農地の将来の型を水の点から分けてみると、次のようになる。

(1) 雨期排水可能地—現在の水稻に代って、雨期にトウモロコシ、緑豆、落花生、いも類、ジュート、ケナフ、ヒマ、ワタ（生育初期から開じょまで）、タバコ（生育期）、そ菜等多くの作物が栽培可能になる。しかしこのようになる可能性のある農地は少い。全く平坦であるからである。

(2) 乾期灌漑可能地—現在乾期の乾燥強く放棄されている農地にトウモロコシ、いも類、緑豆、落花生、ゴマ、タバコ、ワタ、そ菜等の作物が栽培可能となる。現在 Bovel 河（バットアンバン州）の計画や、Siem Reap の沼の水を取入れた灌漑水溝（米国の援助で完成）等があるが、農家の手労働による溜池や井戸で、小面積の灌漑地を作ることは難しくない。

(3) 雨期に深く浸水して、乾期に保水力強いところ—メコン河の高水敷、はん濫地、グランラック周辺の浸水地等で、現在利用されているようにトウモロコシ、タバコ、ゴマ、緑豆、スイカのようなウリ類等。

(4) 雨期にも浸水せず、乾期に保水力強いところ—現在利用されているように果樹、ゴム、コーヒ、コショウ等の永年作物。

(5) 雨期浸水し、乾期極端に乾燥するところ—現在大半の水田はこの型に属し、改良して(1)の型にすることはおおむね不可能で、水稻のほかはわずかにジャートの栽培が可能。

(6) 雨期の浸水大でなく、時に水不足のため水稻の栽培が出来ず、乾期は極端に乾燥するところ—(1)、(2)への改良の可能性もあるだろうが、農家の工夫によつて手労働の土木工事で価値ある農地になる可能性もあると思う。雨期に高うねによって水稻以外の作物を栽培することも考えられる。その他雨期の作物としてジャート、耐水性の緑肥、飼料作物等。

(7) 一年を通じて灌排水が自由にコントロールできる農地—最高の理想的な段階に達した農地で、以上にあげた各種農作物の他、サトウキビやラミーも取入れ、高度の輪作が可能で、収益性の多い果樹、そ菜の栽培も可能となる。

水の点からだけでは以上のようになるが、現在の農地はやせ地が多く、無肥料栽培ではもち論のこと施肥を行っても、経済効果を考えれば、土壤の肥沃度によって相当な制限を受ける。さらに、作物の生態的特性、品質に影響のある収穫期の天候、病虫害発生季節的な消長等により、栽培の時期は制限されてくる。数例をあげると、ワタやサトウキビの様に収穫期が絶対に乾燥期でなければならないものでは、それによって播種期や植付期が決定されるので、栽培期間の中は今より増すが、何時でも栽培するという訳にはいかない。水稻ではカンボディアの品種でも感光性の相当高いものがあり（佐藤幸平；コロソプラン報告）、播種期によっては開花まで非常に長い日数を要したり、また開花期が3～5月の最も暑く乾燥する時期には授精が阻げられて米粒が出来ないことがある（佐藤幸平；同上）。ジャートは9月になると必ず開花するので、5～6月に播かなければならない。豆科の緑肥作物には、播種期によって虫害がひどく採種がほとんど出来ないものもある。トウモロコシは収穫期が雨期であってもカンボディアの雨はしゅう雨性であり、乾燥に注意すれば差支えないので周年栽培が出来る。

結局、現在の平地の既耕地は平たんすぎて排水が出来ないこと、永年の略奪農業で地力が著しく減退している等の理由で改良の見込みが薄いから今のままの水稻作で進んでゆく—もち論そのなかにも改良すべき点は多く、またしなければならぬが—。これからは、起伏のある密

林で被われた肥沃な土地や、一部は1,000メートル以上の高地にも開発を進めてゆくことが望ましい。現在は機械力が発達し、従来最も困難とされていた開墾作業は割合容易になっていることも密林の開拓につき進む勇気をわかしてくれる。ただ現在カンボディアの各所で見かけられるような開墾、栽培のやり方をしていると地力の消耗がひどく、間もなくやせ地と化してしまうだろう。どんどん増えてゆく農村の余剰人口を吸収する工業もなく、町には頑健なシクロ（一種の輪タク）ひきの青年があふれている。彼等の力を国家の繁栄に活用する対策からも新墾地造成は必要であろう。

カンボディア農業の新しい方向は(イ)こういった農業適地一面積の大小にかかわらず一を見出し、(ロ)ここを開拓して総合的な技術を取り入れた経営を行う、(ハ)大切なことは、こういう開拓地に入る農民と技術者の質と能力である。農業土木、栽培（作物、土壌肥料、病害虫、機械等を含む）、畜産、経営、農村生活、衛生等の総合的指導、教育、研究機関が設けられてこういった方向に向うカンボディア農業の指導者を養成することは願わしいことで、日本の援助でできる予定の農畜センターがこの役割を果たすことを願っている。指導的立場にある農業技術及び行政にたずさわる人々の一段の奮起を期待すると共に、優秀な農民の力によってカンボディアの農業がますます発展し、国家の繁栄がもたらされることを祈る。

最後に：読み返してみて、いろいろの矛盾のあることを認める。筆者は在カ2年の日記を読み、回想しながらこの報文を書いた。同じようなことでもその時々を感じ方により、見方によって変わってくるものである。一貫性が無いかもわからないが、あまり整理せずそのまま記した。（昭38.5.12）